

神谷美恵子の世界

今年1年、なんとなく心に留めていた言葉があります。それは「何故私たちではなくあなたが？」という神谷美恵子の言葉と、「なぜ自分ではなくその人に起きたのか」という西加奈子の言葉。それぞれ違うタイミングで知ったのですが、奇妙な共通点を感じ、ことあるごとに思い出していました。今回紹介するのは神谷美恵子の詩やエッセイ、写真、周囲の方々からの言葉などを集めた1冊。彼女の年譜を見てみると、とても波乱万丈！10代から20代にかけて英語、フランス語、ドイツ語、ヘブライ語、ラテン語、イタリア語、古典ギリシア語を学び、20代後半からは医学の道に進み、結婚と出産を経て一家で芦屋へ。神戸女学院大学やカナディアン・アカデミーの教壇に立つこともありました。43才の時にようやく念願だった長島愛生園での仕事が始まります。ハンセン病患者のために働きたい、と初めて思ってから24年。長い道のりでした。自身が結核にかかったり、戦争があつたり、実父が大臣職に就いたため通訳の仕事をしなければならなかったり...あの時代の女性が家庭と仕事を両立させるのはとても難しいことだったでしょう。数々のハードルにもめげず、望みを叶えられたのは「待つ」ことができたからだと思います。恵まれた環境で育ち、あらゆる才能を持っている彼女が自分の信念を見失わず、精神的・肉体的につらい人へ思いを致すことができたのはなぜなのでしょう。周囲の人々が懐古する神谷美恵子は知性に満ちて、まっすぐで、やさしい。そんなパーフェクトな人がいるんだ、と驚き、憧れました。ハンセン病患者への強制隔離政策で批判されている面もありますが、精神科医としてできることは全て行っていたからこそ、入所者、医師、看護師にも慕われていたのではないかと思います。先月も紹介した中井久夫先生が寄せた文章では、彼女の思慮深いエピソードが紹介され、阪神間の精神科医たちの心の拠り所であったことが窺えます。会ったことはないのに、そっとそばにいるかのように想像することができました。一方、西加奈子さんは「世界の悲劇を目にしたとき、いつも『なぜ自分ではなく、その人に起きたのか』という視点から話を組み立てる。経験や偏見による感性の根詰まりを取り除き、視線のクリアな人が増えれば」とインタビューでお話しされました。目の前の1人に向き合うという意味で、話を聞くことも本を読むことも同じ。自分が自分であることと同じように、相手のことを大事に思う想像力が、いま特に大事なのではないかと感じた1年でした。

神谷美恵子

1914年、岡山県生まれ。ルソー教育研究所付属小学校、ジュネーブ国際学校、成城高等女学校、津田英学塾を卒業。コロンビア大学の医学進学課程に進み、東京女子医学専門学校を卒業。東京帝国大学医学部精神科医局で研究後、大阪大学医学部精神科に入局、医学博士に。1957年～1972年、長島愛生園精神科医師として勤務。1979年、65歳で逝去。エッセイを数多く残し、マルクス・アウレリウス『自省録』をはじめ、ヴァージニア・ウルフ、ミッシェル・フーコーなどの翻訳も手がけた。